

# ビンナガ 北太平洋

## Albacore, *Thunnus alalunga*



### 管理・関係機関

中西部太平洋まぐろ類委員会 (WCPFC)、全米熱帯まぐろ類委員会 (IATTC)、北太平洋におけるまぐろ類及びまぐろ類似種に関する国際科学委員会 (ISC)

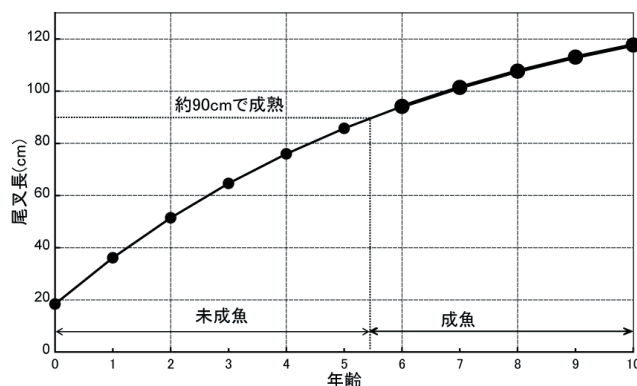
### 最近一年間の動き

2008 年の中型竿釣りによるビンナガ漁獲は7月に、大型竿釣りも8月にはほぼ終了となり、合計の陸揚げ量は約2.0万トンにとどまり、昨年から大きく減少した。

2008年9月にWCPFC北小委員会で、歴史的な産卵親魚量の最低水準を下回らないよう管理することをビンナガの暫定管理目標とすることが合意された。

### 利用・用途

刺身や缶詰原料として利用される。



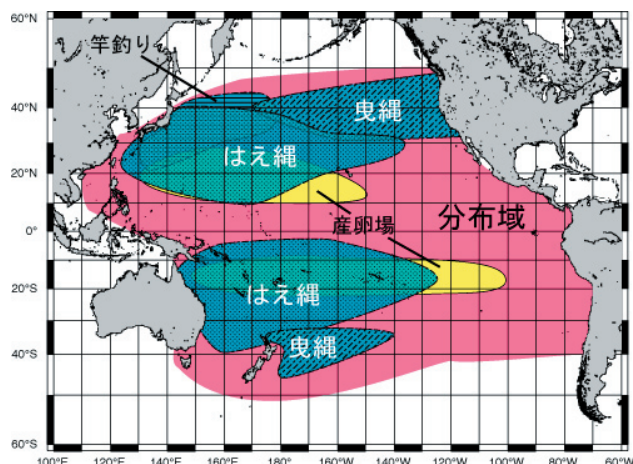
北太平洋ビンナガの年齢と尾叉長 (cm) の関係 (須田 1966)

### 生物学的特性

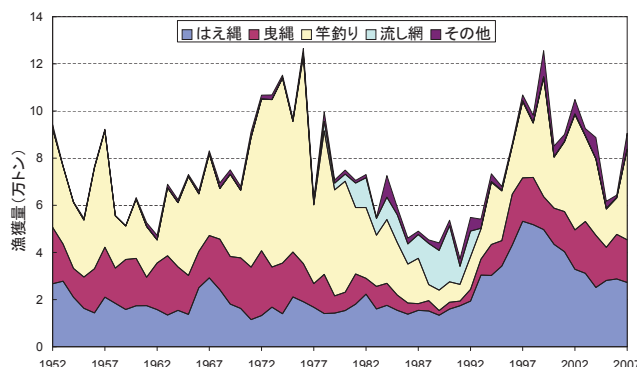
- 寿命：16 歳以上
- 成熟開始年齢：5 歳
- 産卵期・産卵場：4～6月が盛期、台湾・ルソン島からハワイ諸島近海 (水温24℃以上の水域)
- 索餌場：温帯域
- 食性：魚類、甲殻類、頭足類
- 捕食者：まぐろ・かじき類、さめ類、海産哺乳類

### 漁業の特徴

本資源は主に日本の竿釣り、米国の曳縄および日本・台湾のはえ縄で漁獲される。流し網やまき網でも漁獲されるが漁獲量は少ない。竿釣りおよび曳縄漁業は北緯25～45度で夏～秋に行われ、未成魚 (2～5歳魚) を漁獲する。はえ縄漁業は北緯25度付近より北側では冬～春に未成魚および親魚 (6歳魚以上) を、その南側では周年親魚のみを漁獲する。



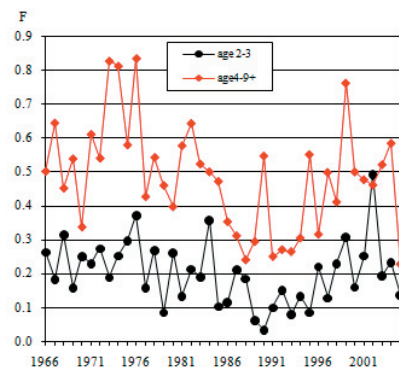
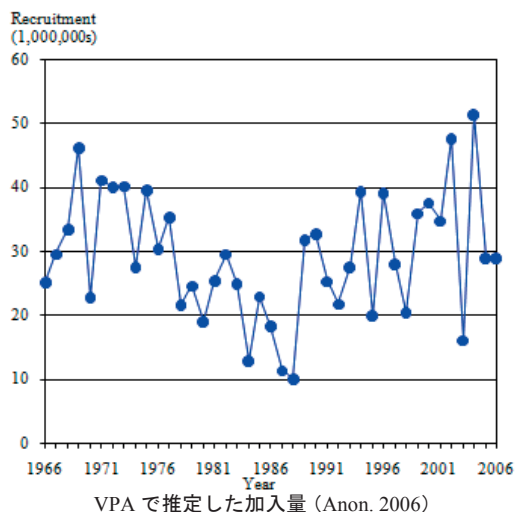
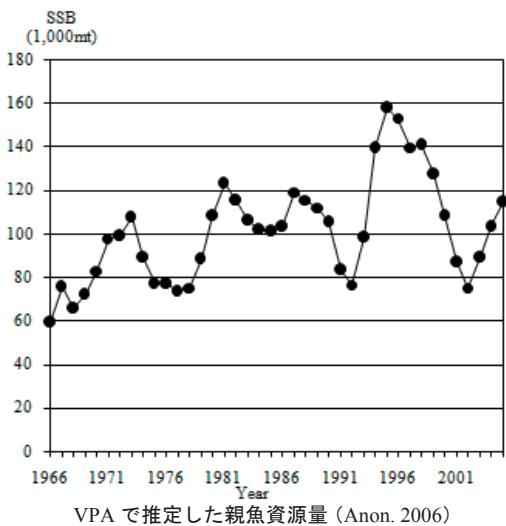
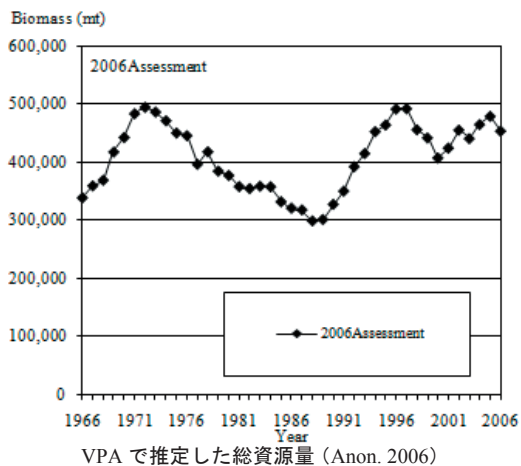
ビンナガの分布と主な漁場  
(久米 1985、西川ほか 1985、上柳 1957)



北太平洋ビンナガの漁法別漁獲量  
(ISC 2008 の数値から作成)

### 漁業資源の動向

本資源の総漁獲量は1970年代に最大(12.5万トン)となり、その後減少し、1991年には3.8万トンまで減少した。しかし、その後漁獲量は著しい増加傾向を示し、1999年には12.1万トンに達した。2000~2004年には8.3万~10.4万トンの高いレベルで推移している。2005、2006年には、やや減少して約6万トン台となったが、2007年には9.1万トンに回復した。かつては全漁獲量に占める竿釣りによる漁獲量の割合が最も大きかったが、1990年代中頃からはえ縄の割合もかなり大きくなっている。



VPA で推定した漁獲死亡係数 (Anon. 2006)  
 age2-3 は2歳魚および3歳魚の、age4-9+ はほぼ完全加入となる4歳魚から9歳魚の漁獲死亡係数(漁獲量による重み付け)の平均値を示す。(VPAの性質により最近年の値は推定精度が低い)

### 資源状態

推定した総資源量は2006年初頭には45万トン、2005年の親魚資源量は11.5万トンであった。つまり、近年の資源量水準および産卵資源量水準は、過去40年間において比較的高い水準にあることがわかった。現在のSSB推定値は過去2番目に高いが、現在のFで漁獲し続けると2010年代中盤までに長期的SSBの平均値程度に減少する推定されたため、現在のFを増加させない必要があると、された。

### 管理方策

2005年のWCPFC年次会議では、北太平洋ビンナガの努力量をこれまでよりも増加させないこと、およびビンナガの漁獲国は努力量と漁獲量を6か月ごとに報告するよう決議した。2008年9月にWCPFC北小委員会で、ビンナガ資源量は、長期的には増減を繰り返していることから、歴史的な産卵親魚量の最低水準を下回らないことの確保を暫定的な管理目標とし、同水準を下回る見込みが生じた場合には、北小委員会として漁獲圧力を削減するための措置をとることが合意された。

### 資源評価まとめ

■ 2006年の資源量は45万トンであり、歴史上高い水準にあるが、漁獲圧もかなり高い。

### 資源管理方策まとめ

■ 2005年のWCPFC年次会議では、努力量をこれまでよりも増加させないことを決議した。

### ビンナガ(北太平洋)の資源の現況(要約表)

資源水準	高位
資源動向	横ばい
世界の漁獲量(最近5年間)	6.2~9.3万トン 平均: 8.0万トン
我が国の漁獲量(最近5年間)	3.8~6.6万トン 平均: 5.2万トン